

# 『変わりゆく信州の自然』から

陸 斉

「公開セミナー」は、当研究所が県民向けに毎年実施してきた研究成果発表会です。環境保全や保健衛生に関する日頃の研究成果や地域の問題を、各地へ出向いてわかりやすく説明し、また、研究所へのみなさまのご意見をお聞きするものです。今年2月に、塩尻市と長野市との共催により、それぞれの市内で1回ずつ開催しました。当日は寒いところを、両会場合わせて164名の方にご来場いただきました。ありがとうございました。

各会場では、研究所職員から、表1のような「研究成果報告」を6題ずつさせていただいた後に、研究内容や

その他研究所へのご質問やご意見・ご要望をうかがいました。今号は、「公開セミナー」の発表内容について特集します。



塩尻会場の様子（展示解説）



長野会場の様子（発表の様子）

表1 平成20年度公開セミナーの概要

	塩尻会場	長野会場
日 時	2月8日(日) 12:00~16:00	2月15日(日) 13:10~16:30
会 場	塩尻総合文化センター(中央公民館・講堂)	長野市生涯学習センター(TOIGO WEST 4階)
参 加 者	84名	80名
研究成果報告	<b>前半「地球温暖化と信州」</b> ■長野県における地球温暖化の実態 ■長野県中東北部における常緑広葉樹シラカシの自生分布 ■なぜ、諏訪湖のカワアイサ(魚を食べるカモ)は増えている? <b>後半「広がる外来生物」</b> ■野生化した外国産飼育哺乳類 ■特定外来生物(植物)の分布と栽培の実態 ■オオクチバスとコクチバス	<b>前半「里山のこれから～歴史から考える～」</b> ■高原型の里山の環境変遷～縄文時代から現代まで～ ■戦前の信州の里山の暮らしから ■信州の野草地～その生き物たちのゆくえ～ <b>後半「希少野生動植物の保全」</b> ■南アルプス南部に生息するライチョウの現状 ■地域が支える野尻湖のホシツリモ復元活動 ■信州の希少野生植物にシカが迫る

意見交換会：みなさんからのご提案・ご質問をお受けし、お答えしました。

## ご要望 ご提言

意見交換会やアンケートによっていただいたご意見の中から、ここでは、主なご要望・ご提言をお伝えします(表2)。励ましや感謝の言葉に力をいただくとともに、これらのご要望・ご提言は、これからの研究所の業務にとって大変に参考になります。行政の一機関である研究所のスタッフだけでできることは限られています。来年度以降も、直接みなさまのご意見をお聞きする機会を持ち、業務の推進に工夫をしていきたいと思っております。ありがとうございました。(くがひとし/循環型社会部)

表2 意見交換会やアンケートから(主なご要望・ご提言)

### ご要望

- 「研究成果の活かし方を示すこと」「市民の保全活動の参考になるような情報提供を」
- 「各地域で、地域の問題を話題にしての開催を」
- 「概ね今回のような実施方法でよい」とのご意見を多くいただきました。また、「1題が短すぎる。せめて30分に(同意見6)」と「1題を短く(15分程度)にして数多く」という両方のご意見をいただきました。今回は、「より長く詳しく」というご意見が多かったです。
- 「詳細な資料が欲しい」というご要望を毎年複数いただいています。大変ありがたいことですが、現実には、資料の作成自体にかかる労力や印刷費等の負担が大きく、実現するのが難しいのが現状です。
- 「自然再生・復元や今後の信州の自然について見直し等を示していただきたい」

### ご提言

- 今回のテーマ以外のテーマ例：地域の自然／自然全般について／保全活動の成功事例(地元・行政・地権者との連携がうまくいっている事例)等／その他、ゴミや資源問題、汚染物質、感染症等について
- 「ボランティアやNPO等との協同作業の実施を企画しては」
- 「他部局との連携や調整で実施しては」「県庁と協力して県民参加の調査を実施しては」

## 特集

## 「地球温暖化と信州」

浜田 崇

温暖化に関連した長野県の話題として、昨年公表した研究プロジェクト成果報告から2題と、新たに検討されている諏訪湖の魚食性鳥類についての話題をとりあげました。なお、前回の「みどりのこえ37号」で温暖化特集をしていますので、興味のある方はそちらの資料も参考にしてください。

まず「長野県における地球温暖化の実態」と題して、浜田 崇が県内の温暖化現象の実態について松本を例にして具体的にお話ししました。年平均気温、日最高・最低気温の年平均値および冬日や、夏日などの日数について経年変化を調べたところ、100年から数十年のタイムスケールで気温の上昇がみられ(図1)、特に近年ほど上昇のスピード(10年あたりに換算)が大きい傾向にあることがわかりました。気温の上昇スピードは、1日のうちでは日最高気温よりは日最低気温のほうが大きく、季節的には、1981年以降では、2月、6月、10月に大きいことがわかりました。また、気温の上昇と関連して、冬日日数は減少、夏日日数は増加する傾向がみられました。

一方、最大積雪深の経年変化は、年による変動が大きく、単調に増加あるいは減少という傾向はみられません。ただし、近年は大雪の年が目立ち、今後の動向を注目していく必要があると考えています。

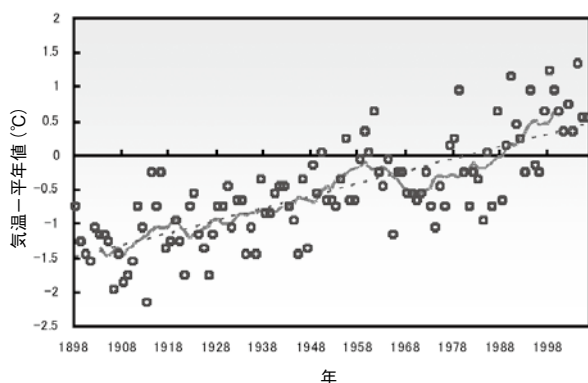


図1 松本における約100年間の気温上昇の推移(浜田)



図2 逸出し野生化した常緑のシラカシ(場所は長野市:大塚撮影)



続いて、大塚孝一が「長野県中東北部における常緑広葉樹シラカシの自生分布」と題し、植物の分布と温暖化との関連について報告しました。シラカシはブナ科コナラ属の暖温帯性常緑広葉樹で、主に西南日本に分布します。長野県では、県の南部と東部の一部に自然分布していますが、県の中東北部で近年植栽木から逸出して野生化したものが見られるようになりました(図2)。このような自生地を千曲川中下流域と松本・安曇野地区において調査した結果、それぞれ25ヶ所および18ヶ所で確認されました。また、上田市の自生地2ヶ所で年々の伸長量と樹齢を測定した結果から、この場所では1990年代前半にシラカシが定着したことがわかりました。以上より、近年の地球温暖化による顕著な気温上昇が、本来自生できなかった場所でのシラカシの自生を可能にした要因の一つではないかと考えています。

最後は、堀田昌伸が「なぜ、諏訪湖のカワアイサ(魚を食べるカモ)は増えている?」と題し、諏訪湖の問題をとりあげました。近年、諏訪湖では冬季にカワアイサの個体数が急増し、湖の重要な水産資源であるワカサギへの影響が懸念されています。一月に全国で一斉に行われているガンカモ調査によれば、諏訪湖でのカワアイサの越冬個体数は、1993年まで数羽程度であったものが、1994年以降、増減を繰り返しながらも2008年には2000羽を超えました(図3)。ただし、その間に個体数の少ない年もみられました。このような個体数の増加要因について、餌資源、諏訪湖の結氷状況、狩猟との関連について検討をしたところ、近年の気温上昇にともない諏訪湖が結氷しにくくなったことと狩猟が禁止されたことが影響している可能性が考えられました。

地球温暖化を身近な問題としてとらえるためにも、県内の自然環境の変化と温暖化との関連について、さらに調査研究を続けていく予定です。

(はまだ たかし/循環型社会部)

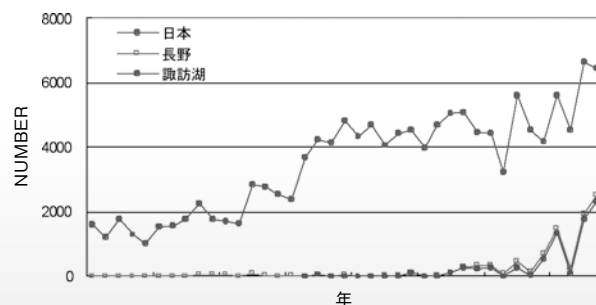


図3 諏訪湖におけるカワアイサの個体数変化(堀田)